慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	不登校現象の家庭要因に対する一考察： 「学校への意味付け」に関わる文化的再生産
Sub Title	A study on the influence of family factors in "futoko" : the cultural reproduction of "Orientation to school"
Author	青田, 泰明(Aota, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.29- 42
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this case study is to analyze the relationship between family factors, especially mother's cultural factors, and the "Futoko" [non-attendance at school]. Previous researches in Sociology of the Family have shown that children are influenced by their cultural background of the family. However, most of the recent studies of "Futoko" have not focused on the influence of family factors but of school factors. Such academic situation relates to criticism about the school environment in Japan - as for example, the criticism of the education system, the problem of bullying , exam war, and break down of the classroom. I recognize the importance of school factors, but I think that the issue of "Futoko" is surely irrelevant to the issue of family. Precisely, to consider this fact that the "Futoko", is child's unaccommodation to a school environment, it is necessary to focus on the differential in children' s ability, what was produced in the irinfancy, to accommodate to a school environment. For accurate recognition of the "Futoko", it is not enough to focus merely on school factors. I executed the interview research to identify the influence of family factors, especially mother's cultural factors. Interviewees consisted of 5 children who had the experience of "Futoko", and their respective mothers. In this research it was found that the child's various "orientation to school " was parallel their mother's. And such facts suggest that the mother's orientation had reproduced to the child's. To show the major characteristics of investigated mothers and children in this study, aweak orientation to studies, a strong orientation to autonomy, father's absence, changing estimation on their own experiences of "Futoko", are of most significance. Besides, it was found that such orientation had risen from mother's family of orientation. To borrow Pierre Bourdieu's theory, such orientation is recognized as "habitus". Hence, this study pointed out that the mother's "habitus" about school and education, produced in her infancy, was found as a major factor for the "Futoko".
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the

Japanese copyright act.

不登校現象の家庭要因に対する一考察

——「学校への意味付け」に関わる文化的再生産——

A Study on the Influence of Family Factors in "Futoko"

—The Cultural Reproduction of "Orientation to School"—

青　田　泰　明*

Yasuhiro Aota

The purpose of this case study is to analyze the relationship between family factors, especially mother's cultural factors, and the "Futoko" [non-attendance at school].

Previous researches in Sociology of the Family have shown that children are influenced by their cultural background of the family. However, most of the recent studies of "Futoko" have not focused on the influence of family factors but of school factors. Such academic situation relates to criticism about the school environment in Japan—as for example, the criticism of the education system, the problem of bullying, exam war, and breakdown of the classroom. I recognize the importance of school factors, but I think that the issue of "Futoko" is surely irrelevant to the issue of family. Precisely, to consider this fact that the "Futoko" is child's unaccommodation to a school environment, it is necessary to focus on the differential in children's ability, what was produced in their infancy, to accommodate to a school environment. For accurate recognition of the "Futoko", it is not enough to focus merely on school factors.

I executed the interview research to identify the influence of family factors, especially mother's cultural factors. Interviewees consisted of 5 children who had the experience of "Futoko" and their respective mothers. In this research it was found that the child's various "orientation to school" was parallel their mother's. And such facts suggest that the mother's orientation had reproduced to the child's. To show the major characteristics of investigated mothers and children in this study, a weak orientation to studies, a strong orientation to autonomy, father's absence, changing estimation on their own experiences of "Futoko", are of most significance. Besides, it was found that such orientation had risen from mother's family of orientation. To borrow Pierre Bourdieu's theory, such orientation is recognized as "habitus". Hence, this study pointed out that the mother's "habitus" about school and education, produced in her infancy, was found as a major factor for the "Futoko".

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程（教育社会学）

1. 問題の所在

1872 年（明治 5 年）に義務教育が制度化されて以来，学校は子どもたちの主要な生活空間としての地位を確立している。しかし一方では，1970 年代半ば以降，「学校に行かない・行けない行為」である不登校現象は持続的に増加し続け[1]，様々な施策が試みられている現在においてもなお，その事態に沈静化の見通しは立っていない。

不登校[2] いう現象は，学校という「場」に対する子どもの不適合である。そのため，近年の社会学領域における研究は，主に学校要因に焦点化して分析・検討を行う傾向にあり，家庭要因を問う視角は次第に周縁に追いやられつつある。しかし，教室内での関係性や対人的相互作用の面から不登校現象を考察する分析（竹川，1993）や，「個人主義の拡散による学校価値の低下」（滝川，1998; 畠中，2000），もしくは「個人主義と学校的管理主義との軋轢」（森田，1991）として不登校現象を捉えるそれら学校要因論は，「学校に対する子どもの適応能力の等質性」がアプリオリなものとして設定されている点で，大きな問題を孕んでいるといえるだろう。不登校現象を語る際に学校要因は切り離せないものであるが，学校という「場」に対する子どもの適応能力自体が，家庭という「場」で培われる部分が大きいことを考えれば，家庭要因に着目する重要性は自明のものといえる。子どもにとっての家庭環境の影響力の強さ，特に母親の影響力の強さは，既に多くの先行研究が明らかにしているところであり，そのような生得的環境の差異を軽視した状態での分析は，的確な不登校理解を妨げることとなるだろう（また的確な不登校援助をも困難にしてしまうだろう）。加野 (2001) や滝川 (1998) が指摘するように，近年の不登校研究における分析視角の偏りは，教育制度批判や学歴社会批判が盛んな社会的文脈の下，「学校に対する異議申し立て行為」として不登校が再構築された結果と考えられる。不登校という複雑な現象を的確に把握し，より具体的かつ有効な支援政策を図るためには，学校要因に焦点化するだけでなく，家庭要因にも再度目を向ける必要があるだろう。

以上のことから本稿では，母子関係を分析の中核に位置付け，子どもの不登校行為に「母親の文化的志向性」が及ぼす影響に着目して分析・検討を試みる[3]。

生育環境における様々な経験（学校経験，学校外教育経験，お稽古事経験，学歴期待）を通じて母親が身体化した「学校に対する志向性」，すなわち「学校への意味付け」が，子どもにも再生産されているのか否か。もしも再生産されている場合，不登校行為に何らかの影響を及ぼしているのか否か。本稿では，不登校経験児 5 名とその母親 5 名に対する聞き取り調査のうち，代表的と思われる 3 組の母子の事例を取り上げ，上記課題を明らかにしていく。

2 節では，不登校研究における家庭要因論の先行研究に目を向け，その分析傾向を概観する。3 節では，本研究の調査に関わる手法とその調査フィールドについて示し，続く 4 節では，母子それぞれの「語り」を 3 組に分けて提示していく。5 節においては，母子の「語り」から見出せる共通特徴を提示し，どのような文化的志向性が不登校行為の生成要因となり得ているのかを検討する。6 節においては，それまでに得られた知見から，母親の「学校への意味付け」と子どもの不登校行為との関係について分析を試みる。本稿では，このような展開で上記目的に迫っていく。

2. 不登校研究における家庭要因論の衰退

1980 年代以降，学校要因に注目が集まることと並行して，家庭要因論は（精神医学・心理学的分析だ

けでなく社会学的分析も含めて）周縁へと追いやられつつある（石戸，1995)。そこには，家庭要因論の主要な担い手であった精神医学や心理学領域による「不登校児童と母親との結びつき」「優等生の息切れ」といった分析が次第に通例化してしまい，「不登校が家族のあり方とつながっているという漠然とした印象に訴える力はあっても，両者のつながりを説得的に解明するものではなかった」（石戸，1995, 244 頁）ことが影響していた。このような精神医学や心理学領域による家庭要因論に対する批判と，「学校教育が非常に劣化してきており，たとえば画一化とか知育偏重とか管理教育，あるいは受験体制とかの進行こそが不登校を生んでいるんだという議論」（滝川，1998, 29 頁）によって，次第に学校要因論が家庭要因論に代わって不登校研究の中心に座していくこととなる。しかし，「不登校は社会階層，社会経済的背景他とも関連が深い。研究は必ずしも多くはないが，比較的共通した特徴が指摘されている」（稲村，1994, 202 頁）と稲村が述べるように，家庭要因として経済階層や階層文化を捉える社会学的視点に立脚した分析は，数少ないながらもその知見を積み重ねている。

古川と菱沼 (1980) は不登校と地域性の関係を統計的に分析し，不登校における家庭の経済的側面の影響力の強さを指摘している。また，星野と八島 (1984) も，不登校と社会的要因との関係に焦点化した先行研究をふまえた上で，地域や家庭といった環境面での問題点を強調している。近年では，東京都足立区の生活保護世帯において，「母親の養育態度の悪化」を背景に不登校が生成されていることを指摘する大谷 (1990) の研究や，北海道札幌市の生活保護世帯の子どもに対する聞き取り調査から，子どもの学校適応に対する生活的・文化的環境の影響力を指摘する久富 (1993) の研究，そしてまた，東京 23 区を対象にした統計調査から，不登校発生率の地域格差を指摘する渡辺 (1997) の研究などが，その代表例として挙げられる。

社会学的視点に立脚した家庭要因論は，かつては法則定立的な分析が主流であったのに対し，近年では質的調査に基づいた個性記述的な分析が主流となっている。確かに，近年の不登校児の特徴は，単なる量的増加ではなくそれに伴う質的多様化にあり（長岡，1995)，森田 (1991) が指摘するように，不登校研究においては量的把握と同様に質的把握にも関心が向けられる必要があるだろう。現代の不登校は，既存の類型カテゴリーでは捉えきるには至らず（滝川，1998)，その意味でも不登校研究における質的研究の意義はこれまで以上に高まっているといえるだろう。しかし一方で，それら先行研究の多くは調査対象を不登校児本人に限定する傾向があり，その調査対象を広く「家族」に設定する試みは未だ十分に行われているとは言い難い。筆者は，不登校現象に関わる社会的要因を的確に把握するためには，子ども本人へのアプローチだけでなく，子どもを取り巻く周囲の人間，特に子どもに強く影響を及ぼし得る「子育ての担い手」たる母親へのアプローチが欠かせないと考えている。以上のことから本研究では，「家族構成員へのアプローチの欠如」を先行研究に内包された問題点の一つとして捉え，不登校児だけでなくその母親に対しても聞き取り調査を実施した。

3. 調査の手法および対象

筆者は，2004 年 7 月から 10 月にかけて，自身がボランティアとして働いている神奈川県内のフリースペース『風の家』[4] に通所する（もしくは通所していた）不登校経験児 5 名とその母親 5 名を対象に，聞き取り調査を実施した[5]。母親に対する聞き取りの実施は，調査対象を子どもに限定する先行研究（久富，1993; 森田，2002 など）[6] に対する批判的認識によるものである。また，本稿の研究関心が母親に身体化された文化的志向性と不登校現象の関係にあったことも，そこには大きく関係している。

調査に際し，子どもと母親には以下の 3 点を依頼した。第一には，約 90〜120 分のインタビューに応じること，第二には面接中の IC レコーダーによる録音の許可，第三には匿名化した上での研究論文への掲載であった。

調査にあたっては，データの比較検討を可能にするために，インタビュー・ガイドを用いた半構造化インタビューの手法を採用した。子どもからは，彼らが生育環境をどのように捉えているのかを把握するためにそのライフヒストリーを聞き取り，また母親からは，母親自身の子ども期の記憶と自身が行った子育てを中心にそのライフヒストリーを聞き取った。調査の時間と場所については，調査対象者の意向を最大限に尊重した[7]。

子どもとのラポールは，主にボランティア活動時や，合宿やキャンプなどの自由参加の行事を通じて形成するに至った。一方，母親とのラポールはその接触機会の少なさゆえに形成が困難であったが，母親からの人望の厚い『風の家』責任者による働きかけによって，調査段階ではある程度の信頼関係が確保できていたように感じられた。

『風の家』は登校復帰を目標に掲げる小・中学生を対象とした民間の不登校児支援施設であり，常時 10 名前後の不登校児が通所している。調査対象となった子どものうち 4 名（男子 2 名，女子 2 名）は，2004 年 3 月まで『風の家』に通所しており，調査時点での学年は高校 1 年生だった。また残りの 1 名（女子）は，調査時点ではまだ通所中であり，学年は中学校 3 年生であった。

4. 不登校を巡る母子の「語り」

本稿では，5 組 10 名の母子のうち代表的と思われる 3 組 6 名を取り上げ，母親の「学校への意味付け」と子どもの「学校への意味付け」との関係，また不登校行為と「学校への意味付け」との関係を見ていく。

【A 親子[8]（子＝A1/母＝A2）】

A1 (15) は公立中学校に通う 3 年生の女子。中学校 1 年生の 1 月から不登校状態にあり，『風の家』には中学校 2 年生への進級と同時に通所し始めていた。中学卒業後の進路としては，単位制高校への進学を希望していた。

不登校の契機は，部活動の欠席だった。冬休み期間中の部活動を無断欠席して以来，「先輩とか先生に怒られるんじゃないかと思って」学校から足が遠ざかり，同じ部屋で寝起きする A2 も決して「『行きなさい』とは言わなかった」ことで（A1 はそれは気楽で良かったと振り返っていた），不登校が長期化していた。父親は，「『行きなさい』っていうか，『行かないの？』」と一度だけ尋ねてきただけだった。父親とは「2 週間に 1 回ぐらい」しか会わないものの，A1 は「それが普通」と感じており，逆に父親の帰宅は A1 にとって「緊張する」出来事となっていた。父親との会話が続かない A1 は，父親とは「今みたいにちょっと会うだけでいい」と述べていた。

不登校以前も以後も，A1 には勉強する習慣がなかった。「勉強好きじゃないから」との理由から，A1 は自分は勉強する必要がないと感じていた。両親も特に勉強を勧めてくることはなかった。A2 のそうした態度は，「（学校に）行ってた頃と変わらない」ものだった。不登校になる以前から，親から勉強について何かを言われるようなことはなかった。

A1 は「時々，恥ずかしいって思う時があった」と述べているように，不登校に対して負い目を抱いてもいた。TV で不登校の話題を目にすることが恥ずかしく，登校復帰する夢を見ることさえあった。しか

しその一方でA1は，「こうなって良かった」とも振り返っており，そこには規範と逸脱の間で揺れ動くA1の姿があった。

A2 (41) は，東京都内の定時制高校に通学しながら化粧品会社で女工をし，高校卒業後は建設業の事務員をはじめ職を転々とし，現在は税理士事務所でパートをしている。夫 (43) は東京都出身で，専門学校卒業後は都内の広告企業で働いている。夫は勤務先が遠いこともあり，ほとんど自宅には帰って来ない。

不登校状態に陥ったA1を見て，A2は「腫れ物に触れる」かのように「とりあえずは，休ませてあげるのが良い」と考え，登校を催促することはしていなかった。毎朝A1に声をかけるものの，自身の出勤時間との関係上「ずっと起こし続けるわけにもいかず」，今では途中で諦めて出勤するのが日常化していた。

A1が勉強しないことに対して，A2は特に気にしていなかった。そもそもA2自身かつては「勉強嫌いだった」。家で勉強した経験はほとんどなく，成績も「悪かった」。A2の両親も成績を気にする人ではなかった。A2は，自分の母親は「(勉強には) 無頓着だった」と振り返っていた。A2は，「(勉強しなくても) 別にいいじゃん」，「(子ども時代は) 勉強よりも遊びの方の勉強の方が大事」と述べ，学力面での成長ではなく「人間として，ちゃんと成長して欲しい」という考え方を持っていた。またA2は，勉強について「自分がやる気になんなきゃ，いくら (親が) 言ったって空回り」と語っており，反発されるくらいなら言わない方が良いと考えていた。とはいえ，A2は「社会に出てからのこと考えると，やっぱり高校は最低出ておかないと」と述べ，高校進学の必要性は感じていた。しかし，『風の家』の責任者に勧められた高校の進学説明会は，「時間もったいないかな」と考え，実際には見学していなかった。

仕事が忙しく「月に1回帰ってくれば良い」夫とは，子育てについて話し合う機会がなかった (機会があっても夫は話をほとんど聞いてくれなかった)。A2は「この人に何話してもしょうがない」と述べるように，夫に対して諦めの気持ちを抱いていた。不登校中のA1に対して，夫が何か働きかけを行うようなことはなかった。

【B親子[9] (子＝B1/母＝B2)】

B1 (16) は高校1年生の女子。小学校5年生から中学校卒業までの約5年間，慢性的な不登校状態にあり，『風の家』には中学校2年生から卒業まで通っていた。現在は，神奈川県内の単位制高校に進学している。

不登校の契機は，学校での友人関係だった。小学校5年生の時，級友の「じゃれつき」行為を苦痛に感じたB1は，担任教師に相談しても解決の兆しが見えなかったことから，学校に行くことをやめていた。また，中学校もその級友と同じ学校に進学したため，B1は同様の理由で不登校に陥っていた。B1の「これ以上，なんか傷つきたくない」という訴えに対して，B2の反応は「別に良いよみたいな感じ」だったとB1は振り返っていた。そのような母親の容認には，姉も不登校経験児だったことが関係していたとB1は感じていた。B2が語った「死なれるくらいなら学校なんか行かないほうがいい」という言葉を，B1は今も憶えていた。B1にとって，登校を催促されなかったことは「楽だった」。また，父親もB1の不登校に対しては「自分で決めることだから」と距離を置いて見ているようだった。もともと父親は「あんまり干渉しない」人だった。

不登校以前も以後も，B1には勉強する習慣がなかった。B2も勉強や成績には関心がないようだったと，B1は振り返っていた。しかし，「(B2は) やっぱ受験っていうと心配みたい」と述べるように，B1

はB2の高校進学に対する意識の強さについては感じていた。とはいえ，父親とは「受験頑張れ」と声をかけられる程度の接触しかなく，B1は「ほかに言うことないの？」と語り，父親に対して物足りなさを感じているようだった。

B1にとっては，世間の目よりも学校の友人たちの目の方が怖かった。B1は，中学校時代に通塾しなかった理由を「学校の子がいるから」と述べていた。外出の際は学友との接触だけを常に気にしていた。「(学校に) 行きたいとは思ってたんだけど，なんか行けなかった」という言葉にも表れているように，B1は自身の不登校行為を全面的に肯定しているわけではなく，胸のうちに葛藤を抱え込んでいた。

B2 (49) は秋田県内の専門学校を卒業後，夫 (53) との結婚を機に神奈川県に移住していた。現在はホームヘルパーのパートをしている。夫は秋田県内の高校を卒業後，神奈川県で通信機器企業に勤めている。

不登校の意思表示をするB1に対して，B2は「それもまた良いんじゃない」と答えており，登校復帰を促すことはしなかった。B2は「(学校には) 行かないなら行かなくても」，「自分でまた行きたいなって思った時がまたスタートって感じでも良い」と考えていた。不登校の援助に対しても，B2は「B1が言い出すまで私からは何も言わなかった」と述べ，子どもの自主性に期待していた。とはいえ，B2は「上の子 (B1の姉) もイジメがらみで不登校だった」ことから，「他の子は今みんな学校に行ってる時間なのに」，「うちって何なんだろ」と自身の子育てについて悩むこともあった。しかし，「行きたくない」と言うB1に対して，他の不登校児を抱える母親のように登校を催促することはできなかったと，B2は当時を振り返っていた。

地方出身のB2は，「(同級生の母親たちに)『これが良いんだって』言われれば，『あ，そうなの』という感じでこう，買い与えてた」と述べるように，自身の子育て・教育に関する情報不足を感じていた。また，そのようにして行われた教育投資は「コツコツやるタイプじゃなかった」B1にはあまり効果がなかったとも振り返っていた。もともと「やっぱ (何事も) 自分から言わないと続かない」という考え方を持っていたB2は，そこでの経験から，「嫌な時間にお金をかけても仕方ない」と考え，子どもへの教育投資を控えるようになっていった。そもそも勉強面に関しては，B2自身，両親から口うるさく言われた経験はなかった。また，勉強に関心があるのはどちらかと言えば「父親の方」で，B2にとって母親は勉強に関わる存在ではなかった。

B1の中学卒業後の進路については，ストレートの高校進学を期待しているわけではなかった。B1が不登校になった時同様に，「自分が行きたい時にまたスタートすれば良い」と考えていた。

夫は出張など仕事が忙しく，それほど子育てには参加してこなかった。子育ての重圧を一身に受けるB2だったが，「(夫は) 遅く会社から帰ってきても愚痴は聞いてくれた」と述べ，働く夫に対して理解を示していた。B2は夫の不在の原因を「仕事の忙しさ」に求め，また，「離れたところから見れる」存在＝客観視できる存在として重要であったと振り返っていた。

【C親子[10] (子＝C1/母＝C2)】

C1 (15) は高校1年生の男子。中学校1年生の9月から卒業まで不登校状態にあり，『風の家』には中学校2年生から卒業まで通っていた。現在は，神奈川県内の全日制高校に進学している。

不登校の契機は，学校での友人関係だった。小学校卒業と同時に引越しを行ったC1は，学区の変更に伴い，気心の知れた小学校時代の友人を周囲から失ってしまった。顔馴染みのいない中学校のクラスや部活の中で，C1は「なんか無理して」，「相手ばっかり譲るっていうか」，「自分殺した，みたいな」と語っ

ているように，周りの友人に合わせるもどかしさ，息苦しさを感じていた。結果，夏休み明けにはストレス性の喘息を発症させ，その後は学校から完全に足を遠ざけてしまっていた。C1 は，喘息による欠席をきっかけに，堪えていた気持ちが「一気に砕けた」と振り返っていた。学校を休み始めても，C2 からは「行けとはなんも言われなかった」。接触機会は乏しかったが，父親の態度も「おんなじ感じ」だった。C1 は両親から登校を催促されなかったことについて「(催促されることが) 嫌って分かってたみたい」と振り返り，そこに親の配慮を感じていた。

C1 は家で勉強をした記憶がほとんどなかったが，小学校時代の成績はテスト自体が簡単だったこともあって，「平行線」のように安定していた。時には悪い点数を取ることもあったが，そのような時にも C2 は「(勉強に関しては) たいして言わない」人だった。C1 は，両親の勉強面に対する関心は高くはなかったと感じていた。

C1 は外出に対して少なからず抵抗感を持っていた。買い物に行く時も，学友との接触可能性が低いことが前提となっていた。「学校行ってないってのがやっぱり嫌だった」と述べるように，C1 にとって学校は「できれば戻りたい」場所であった。C1 は，その気持ちを中学校卒業まで抱き続けていた。

C2 (48) は大阪府の短期大学を卒業後，現在の夫 (51) との結婚を機に神奈川県に移住しており，現在は専業主婦をしている。夫 (51) も大阪府出身で，府内の国立大学を卒業後，神奈川県内の大手電子機器企業で SE として勤めている。

「(C1 は) 悪いこと全然してない」と語るとおり，不登校状態に陥った C1 に対して，C2 は「絶対行けともなんとも言わない」ように心掛けていた。C2 にしてみれば，引越し先の中学校には「デリカシーのない子」が多かったことが問題だった。C1 には「嫌だったら嫌って言って良い」と伝えていた。

C1 の勉強に関して，C2 は「勉強はやる時にやればいい」，「親はそういうこと (勉強) を勧めたくない」，「親が必死になってすることのほどでもない」という持論を述べていた。そもそも C2 自身，「あんまり (勉強が) 好きじゃなかったんで，勧めるのも嫌」だった。また，C2 の両親は勉強や成績に関して厳しかったが，C2 に勉強を教えるようなことはなく，特に母親は勉強を「絶対見ない」人だった。C2 は「(何事も) 自分でやって当たり前」という子育て方針の下で育てられてきていた。

C1 の高校進学に関して，C2 は「どっか行けるところがあるだけでありがたい」と述べる一方，不登校経験者が集まる単位制高校については「あの子のなんか雰囲気とちょっと合わない」と感じていた。

「自由奔放に育ってきた」夫は，C2 同様に「『本人次第』という考え方をする人だった」。C2 は「(夫は) 結構協力してくれた」と述べるものの，実質的な子育ての担い手が C2 であったことは明白であり，C1 の不登校中もそうした役割分担に変化はなかった。C2 は，C1 の不登校について「夫に話しても仕方が無い」という諦めの気持ちと，「話したら悪い」という遠慮の気持ちを抱いていた。また，夫について「物足りない」と述べる一方，C2 は「客観的に意見をいちいち言ってもらう」といった第三者的役割を夫に付与することで，感謝の気持ちも抱いていた。

5. 「語り」から見えてくるもの

5.1　弱い勉強への動機付け

3 組の事例の特徴としては，いずれの母親も自らが勉強に手を貸すことに対して強い否定的感情を抱いており，勉強への動機付けが弱かったことが挙げられる。母親たちは子ども本人の自主的な行動を漠然と期待してはいるものの，子どもたちに対する「勉強への動機付け」が損なわれていたために，彼女

たちが用意する「自主性重視」の環境は，具体的支援に不足した「勉強するもしないも自由」という環境に等しかった。このような子どもの自主性を過剰に重視する志向は，母親3名に共通する傾向の一つであったが，「本人次第」や「やりたいこと」に関する彼女たちの「語り」からは，「自主性重視」という論理が結果的には「教育意欲の抑制」という事態を生起させていたことが見て取れた。

A1:「(勉強について親には) ホント言われたことないから」「(勉強は) ほとんどやってない」
A2:「(自分も) 勉強嫌いだったので」「私も勉強嫌いだったから。別に良いじゃん，みたいな」
B1:「(親は勉強について) あんまり言わなかったけど」「やっぱ自分次第なんだなって」
B2:「(勉強は) やりたい時にやるのが，うん，それが一番身に付くんじゃないかなって」
C1:「(親は勉強について) たいして言わなかった」「(自分は) 勉強に関して無関心だった」
C2:「好きじゃなかったんですけど，勉強は」，「(根を詰めて勉強するC1に対して) やめなさいって親は言ったんです。『そんなに必死にならなくて良いよ』って」

上記の「語り」からは，「勉強に対する志向性」を強く身体化させるには不十分な土壌を見て取ることができる。そのような母親の態度は，直接的な働きかけだけでなく，子どもたちに「勉強に関心の低い母親」という印象を植え付けることで，間接的にも子どもの勉強に対する関心の抑制に繋がっていたと考えられる。

そもそもわが国においては大正時代以降，性別役割分業体制の強化を背景に，母親の教育意欲が高まってきた経緯がある。高度経済成長期の末頃には，「他の誰でもなく親こそが子供の教育の責任者であるという観念を持ち，子供を濃密な教育的視線の下で養育する，『教育する家族』」(広田，1999, 70頁) という思想が社会全体に浸透し，高度経済成長期を経た母親たちは「経済的・時間的余裕」「家業の消失」「情報化」「少子化傾向」という家庭を巡る諸要因から，「『人格も学力も』という全方位型の教育関心」を内在化し，「以前よりもはるかに多くの母親たちが，パーフェクト・チャイルドを作り上げるべくパーフェクト・マザーを目指すように」(広田，1999, 122-123頁) なっていった。広田が指摘するように，現代においては「家庭機能の外部化」という事態で母親が直接的な支援主体ではなくなっているものの，「家庭外のしつけや教育の機会は，親が選択し，許可・準備してやったものに限られる」(広田，1999, 127頁) という意味で，親の責任はこれまでと同様に重大であり，そこには極めて教育的視線と長期的な計算が求められているといえるだろう。しかしながら，本調査で対象となった母親たちには，そのような教育的視線や長期的計算を十分に見て取ることはできなかった。

勉強意欲と登校意欲は「学校空間に対する参入意欲」という面である程度の相同性を確保していると考えられる (小林，2003)。上記事例からは，母親の低い勉強意欲が，子育て行為を通じて子どもに再生産されている様子が見出された。このような低い勉強意欲は，直接的ではないにせよ，間接的に「不登校」生成に関わっていたと思われる。

また，このような母親の「勉強への動機付けの弱さ」と「自主性に対する過剰な擦り寄り」には，「親自身の勉強に対する拒否感」だけでなく，「指導力への不安」や「メディアによる影響」など多様な要因が関わっており，これらは今後の研究の課題ともなるだろう。

5.2 抑制される登校促進意欲

3組の事例からは，母親が子どもの不登校に対し登校を催促することなく，むしろ不登校を許容・容

認する対応に終始していたことが見て取れた。A2が「何て声かけて良いのかわからなくて」と述べるように，不登校という不測の事態において誰もが的確な対応を取れるわけではないだろう。またそもそも，不登校に対する「的確な」対応とはあくまで個別的なものであり，普遍的なものであるはずはない。

しかし，「許容・容認」という初期対応は，最初から子どもの登校復帰を断念する行為であることに間違いはない。ここでは，そのような対応の善し悪しは別にして，何故そのような登校促進意欲の抑制が母親の中でなされたのかについて検討していく。

調査対象となった母親たちの初期対応からは，二通りの傾向が見て取れた。一つは，母親に身体化された「学校への意味付け」が弱かったため，登校促進意欲が喚起されなかった事例。もう一つは，身体化した「学校への意味付け」は決して弱くはなかったものの，その「過剰な自主性重視志向」によって不登校が「子どもの自主的選択」として再構築された結果，登校促進意欲が抑制されていた事例である。

A1:「(母親は) そんなに『行きなさい』とか言わなかった」「『頑張りすぎてたんじゃない？』って」
A2:「とりあえずは，休ませてあげるのが良いのかな，とか思ったり」「私からは何も言ってません」
B1:「『学校行かないよ』って言ったら，お母さんが『良いよ』って」
B2:「『行きなさい』ってことは，言わなかった」「『それもまた良いんじゃないの』って」
C1:「(母親から) 行けとは何も言われなかった」「嫌ってわかってたみたいだから」
C2:「もう絶対行けともなんとも言わないんです」「悪いこと全然してないから怒らない」

子どもの意見や権利を尊重することは重要な志向であることに間違いはないが，ここで取り上げる「過剰な自主性重視志向」が孕む問題とは，そのような志向が「子どもに対する関与」への厚い障壁となってしまうことであろう。三つの事例からは，「自主性」という曖昧な概念に対する母親の強い傾倒が，家庭環境の諸条件（経済的側面，母親の就労の有無，家族構成員同士の関係など）との関係の中で，無意識的に「教育意欲の抑制」という事態を生起させ，子どもの不登校に対する「選択肢の無提示」や「ケア意欲の抑制」という事態を招いていたことが見て取れた。

近年，家庭外の多様な教育機会を巧みに選択していることから，ジェネラルマネージャーとしての親役割に注目が集まり「間接的ケア主体としての母親」が指摘されるが（広田，1999），それは決して教育責任を放棄して良いというわけではないだろう。

5.3　継続する父親不在

3組の事例の共通特徴としては，子どもは父親の存在を希薄に感じ，母親は夫の不在に対して「仕事の忙しさ」という原因を付与し，「諦め」とも「妥協」ともつかない「不満」をわずかながら内包した感情を抱いていたことが挙げられる。

A1:「ほとんど休みの日にしか帰ってこない」「逆に，あんまり家に居ると，なんか居づらくなる」
A2:「月に1回帰ってくれば良いかなみたいな感じなんですよ」「この人に何話してもしょうがない，って思っちゃったから」「主人は優しくて，あの，ま，休みになるとまぁ，子どものこととかも面倒とかは見てくれたんです」「なんか忙しいから，なんか悪いかなっていうか」
B1:「(父親は) あんまり干渉しないかな」「朝しかあんま喋らない」
B2:「ほとんど出張でいなかったですね」「帰ってくるのも遅かったですし」「女親はこう入り込ん

じゃうけど，主人は何て言うんでしょ，こうちょっと離れたところから見れるっていうか」

C1:「あんまり，別に（話さない）」「（父親に対しては）あんまイメージない」

C2:「主人は分からないと思うんですね」「ちょっと物足りないかな」「言ってもしょうがないから言わないようにしてたんです」「なんか遠慮したりして（笑），なんかこう気遣いなんかし過ぎて」

歴史的には，父親は子育てにおいて積極的に役割を担う存在であった（舩橋，1999）。すなわち，「学校教育の補完的な役割を担うべき家庭教育，その担い手としての母親という家庭教育概念の確立」（小山，1991, 235 頁）が，父親が子育て役割を手放す契機となり，「父親は一家の稼ぎ手として職業労働に従事し，母親は基本的に家事・育児を引き受ける，という近代的な性別役割分業規範が成立し，しだいに広がって」（舩橋，1999, 93 頁）いくことなった。「さまざまな国際比較調査を見ても，先進産業諸国のなかで，日本の父親の子どもとの接触時間がもっとも少なくなっている。夫婦家族といえども，実質的には，母子家族となっているのが，子どものいる日本の家族の現在である」と渡辺（渡辺，1999, 176 頁）が指摘するように，現代日本において「父親の不在」という事態は普遍的なものになりつつある。とはいえ，「フルタイムの就業者である父親と，パートタイムの就業者であり，フルタイムの子育て専従者である母親」（渡辺，1999, 177 頁）という家族の構図の下で，子育ての重圧が母親一人に降りかかり，さらに不登校という不測の事態に対する対応も母親に一任されるという現状は，子どもにとっても母親にとっても望ましい環境ではあり得ない。不登校問題における「父親の存在」の検討の重要性が，改めて指摘できる。

5.4 根強い登校規範

3 組すべての事例の子どもが，不登校中は自身の不登校経験に負い目を感じており，そこからは，子ども自身に身体化された根強い「登校規範」が見て取れた。学校空間から逸脱しても社会規範からは逸脱しきれない子どもたちの姿，「学校に行きたいけど行けない」という子どもたちの葛藤がそこには見られた。また一方で，母子に共通する特徴としては，不登校経験に対する「肯定的解釈」が挙げられる。このような意識は，時間経過による単純な問題の風化ではなく，子どもの高校進学を前提としてこその意識転換だったように思われる。

A1:「なんか時々，恥ずかしいって思う時が」「でもなんか，こうなって良かった気はするんだけど」

A2:「今の A1 を見ると，やっぱり必要な時間だったのかなって思うんですね」

B1:「行きたいとは思ってたんだけど，なんか行けなかった」

B2:「自分でまた行きたいなって思った時がまたスタートって感じでも良いかなって」

C1:「学校行ってないってのがやっぱり嫌だった」

C2:「自分もあの人（夫）もそれで勉強になったと思ってるし」

高校進学という形で登校復帰を果たした（果たす）母子にとって，不登校経験という「逸脱の過去」は後ろめたさ以外のなにものでもなく，母子はスティグマからの解放を目指して「不登校経験に対する肯定的解釈」を無意識に志向していたと考えられる。またこのことからは，学歴のレール上に復帰しなければ救済されないと感じるほど，現在の教育制度が国民に深く浸透していることが見て取れる。

日本では1970年代後半以降の「学校問題の社会問題化」という事態を発端に，学歴主義や受験競争，画一的・管理主義的教育が批判の対象とされ続け（関，1987），近年においても，カリキュラムの問題など学校に内包された様々な問題点が指摘されるなど，教育制度に対する批判は後を絶たない。しかし，今回取り扱った事例では，そこからの「離脱」は未だに「逸脱」として客観的にも主観的にも捉えられていた。不登校児とその母親が対抗文化の構築に失敗していたことは，教育制度の持つ社会的圧力と引力が未だ強固に保持されていることを示唆しているといえるだろう。

6.「学校への意味付け」に関わる文化的再生産

以上のことから，母親の「学校への意味付け」と子どもの不登校との関係には，主に三つの特徴を見出すことができる。

①母親に身体化された「弱い学校への意味付け」は，子どもにも再生産されていた。
②母親に身体化された「弱い学校への意味付け」は，母親の子どもに対する登校促進意欲にも影響を及ぼし，子どもの不登校行為を容易にする土壌を形成していた。
③母親から子どもに再生産されていた学校や教育に関わる様々な文化的志向性は，母親個人に起因するものではなく，母親自身の生育環境，すなわち母親の定位家族において身体化されたものだった。

母親がその生育環境から身体化し，子どもへと再生産されるこうした「学校への意味付け」は，いわばブルデュー(Bourdieu)が「身体化した文化資本」と呼ぶものである。「身体化された文化資本」とは，多くの個人的時間を代償に獲得した「生き物になった財産」，血肉と化した文化資本のことであり，そこには運動や楽器の演奏などフィジカル且つ可視的に表出されるものだけでなく，趣味・嗜好といった潜在的志向までも含まれている。このような視点で「学校への意味付け」を捉えれば，この文化的志向性は，実践と表象の産出原理として機能する「ハビトゥス」の一側面であるといえるだろう。「ハビトゥス」とは，「現に進行しつつあるものの中に存続する過去，自らの原理に従って，つまり内部法則，それを通して，時局変動の直接の制約には還元できない外部必然性の法則が絶えず作動するような，そうした内部法則に従って構造化される実践の中に自己実現し恒久化する傾向を持つ過去」（Bourdieu 訳本，1988, 86頁）であり，「所与の社会的文化的環境のなかで人びとが習得する，無意識ないし半意識において機能するものの見方，感じ方，振舞い方の一定の性向」（宮島，1995, 13頁）を意味している。対峙する事象に対して親和と拒絶を感じ分ける心的諸性向としてのハビトゥスは，主に家庭という場において，親の意識的・無意識的な社会化過程の中で生成されていくこととなる。本稿で取り上げた3組の事例からも，家庭で培われてきた志向性や価値観といった「身体化された文化資本」が不登校生成に影響を及ぼしていることが見て取れた。そのような事態は，母親の心的性向としてのハビトゥスが，意識的もしくは無意識的に子どもに再生産された結果と考えられるだろう。性別役割分業の下で「父親の不在」が普遍化した現代社会[11]において，「母親に身体化されたハビトゥス（母親ハビトゥス）」は子どもに対する影響力を強化し，不登校生成にも大きく関わっていたと考えられる[12]。

しかし，不登校現象に関わる家庭要因の把握には，「母親の重要性」という伝統的不登校研究の視点に立脚しながらも，安易な母源病的解釈に陥ることなく，その背景にある父親の存在に改めて目を向ける

必要もある。3 組の事例において父親の存在は希薄化していたが,「日本の父親は仕事人間で子育てにかかわらないと言われるが, より正確には, かかわり方が直接的でなく間接的であると言うべきかもしれない」(舩橋, 1999, 91 頁) という舩橋による指摘は, 検討する必要があるものと思われる。

また,「個性」や「自主性」を重んじる近年の社会的傾向やメディアの影響力も, 検討に値する大きな要因であることに間違いはない。3 組の事例においては, 母子に共通する「過剰な自主性重視志向」が, 不登校を許容・容認する意識に結び付いていた。1985 年 6 月の臨時教育審議会第一次答申で主張された「個性重視の原則」が, 小・中・高等学校の学習指導要領に反映されて以来,「自主性」や「個性」を重視する社会的傾向は強化されてきており (片桐, 1995), このような「自主性」や「個性」を巡る志向性が不登校生成に及ぼす影響についても, 今後は検討を加えていく必要があるだろう[13)]。

そして最終的には, 学校教育に関する対抗文化の形成を困難にするほど強い社会的圧力と堅固な社会システムの下での効果的な不登校支援や援助について, 検討していく必要があると考える。そのためにも, 今後は学校要因だけでなく家庭要因についても再び目を向け, さらにそこでは, 学校や教育に対する母親の文化的志向性, すなわち「母親ハビトゥス」の再生産的側面を, 母子を取り囲む社会的諸条件とともに多角的に捉えていくことが重要と思われる。

注

1) 『学校基本調査』によれば, 2002 年度の不登校児童生徒数は前年度より減少していたものの, 依然として 13 万人前後の高水準を維持していることに変わりはない。2004 年度の不登校児童生徒数は, 小学校・中学校合わせて 126,212 人, またその出現率は 1.15% に達している。
2) 本稿で取り扱う「不登校」の定義は, 保坂 (2000) による「脱落型不登校」の定義に依拠している。保坂は,「不登校」を, 病理的・神経症的側面による「神経症型不登校」と, 学校文化からの脱落型・怠学型を示す「脱落型不登校」に区別し,「教師への手引書や教育相談・生徒指導の研修では神経症型不登校の説明が大きな位置を占め, この脱落型不登校が軽視されているきらいがある」(保坂, 2000, 48 頁) と指摘している。
3) 本稿は筆者の 2004 年度修士論文を基礎に置き, 更なる展開を加えたものとなっている。
4) フリースペースについては仮名である。
5) 「不登校」に関わる人々への接近は困難を極め, サンプリングに関しては, 少なからず利便性が基準とされた面 (接触可能性が高い対象者に限定したサンプリング) が否めない。また, サンプリング数もわずか 5 組 10 名であるため, 筆者自身, 本研究は一般化可能性を目的としたものではなく, あくまで仮説発見型の研究であると考えている。
6) 多様化・複雑化した「不登校」を質的に捉えることの重要性は, 先行研究において示唆されているものの (森田, 1991; 保坂, 2000), その家族構成員に対するアプローチは行われていない。久富 (1993) も, 北海道札幌市の生活保護世帯を対象に聞き取り調査を実施し, 子どもの学校適応に対する家庭要因 (家庭の生活的・文化的環境) の重要性について指摘しながらも, 実際にはその母親に対するアプローチを試みてはいない。
7) フリースペース内の一室か, 周辺の喫茶店がほとんどだった。
8) A1 は 2004 年 9 月 28 日に,『風の家』で約 1 時間の面接を行った。A2 は二度にわたり面接を行い, 一度目が 2004 年 10 月 21 日, 二度目が 2004 年 10 月 27 日であった。調査場所は, 一度目が『風の家』, 二度目が『風の家』周辺の喫茶店だった。それぞれ 1 時間半程度の時間で, 計 3 時間の面接を行った。
9) B1 は 2004 年 8 月 7 日に, 横浜駅近辺の喫茶店で約 1 時間半の面接を行った。B2 は 2004 年 9 月 2 日に,『風の家』で約 1 時間半の面接を行った。
10) C1 は 2004 年 8 月 2 日に,『風の家』で, 約 1 時間をかけて面接を行った。C2 は 2004 年 8 月 25 日に,『風の家』で約 1 時間半の面接を行った。
11) 「家庭と職場が画然と区分けされた現代においては, 仕事の世界が, 男性を, 働く男ではあっても働く〈親〉でありえない状況に追い込んでいる」(春日, 1989, 28 頁)。
12) しかし, 不登校の初期対応に関わる親子の「語り」からは, 母親と子どもの相互関係の中から対応決定がなさ

れる可能性も見受けられ，そのような不登校を巡る母親と子どもとの関係性に対しては，今後も検討する必要があると考える。

13) 特に，「現代の若者は，すでに与件として個性的だというよりも，むしろ何とかして個性的であらねばならないと焦っているのが現実」（土井，2001, 14 頁）という土井による指摘は，検討する必要があるものと思われる。

参考文献

Bourdieu, Pierre　1979. *La distinction: Critique sociale du judgement* (Paris, Éditions de Minuit). 石井洋二郎訳，1989, 1990,『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ』藤原書店.

――― 1980. *Le Sens Pratique* (Paris, Éditions de Minuit). 今村仁司・港道隆訳，1988,『実践感覚 1』みすず書房.

土井隆義　2001.「社会病理としての個性化―『いきなり型』少年犯罪の理解のために」『社会学ジャーナル』26, 1-33.

Flick, Uwe　1995. *QUALITATIVE FORSCHUNG*: Rowohlt Taschenbuch Verlag Gmbh, Reinbek bei Hamburg. 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳，2002,『質的研究入門―〈人間科学〉のための方法論』春秋社.

畠中宗一　2000.『教育臨床の社会学』世界思想社.

広田照幸　1999.『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書.

本田由紀　1998.「教育意識の規定要因と効果」，苅谷剛彦編『1995 年 SSM 調査シリーズ 11　教育と職業―構造と意識の分析』1995 年 SSM 調査委員会，179-197.

保坂　亨　2000.『学校を欠席する子どもたち―長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会.

星野仁彦・八島祐子　1984.「現代の登校拒否児の家族・社会的背景」『Medical Way』1(8), 69-72.

舩橋恵子　1999.「父親の現在―ひらかれた父親論へ」，渡辺秀樹編『シリーズ　子どもと教育の社会学 3　変容する家族と子ども―家族は子どもにとっての資源か』教育出版，85-105.

古川八郎・菱沼洋子　1980.「学校ぎらいの統計資料 (1)―東京都における出現率の推移と社会的要因の考察」『児童精神医学とその近接領域』21(5), 34-43.

稲村　博　1994.『不登校の研究』新曜社.

石戸教嗣　1995.「家族システムと不登校問題」，竹内　洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社，244-259.

加野芳正　2001.「不登校問題の社会学に向けて」『教育社会学研究』68 金子書房，5-23.

苅谷剛彦　1995.『大衆教育社会のゆくえ』中公新書.

――― 2001.『階層化日本と教育危機―不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂.

春日キスヨ　1989.『父子家庭を生きる』勁草書房.

片岡栄美　1996.「階級のハビトゥスとしての文化弁別力とその社会的構成―文化評価におけるディスタンクシオンの感覚」『理論と方法』11(1), 1-25,

――― 2001.「教育達成過程における家族の教育戦略―文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に」『教育学研究』68(3), 259-273.

神原文子　2000.「家族階層と子育て」，神原文子・高田洋子編『教育期の子育てと親子関係』ミネルヴァ書房，146-168.

片桐芳雄　1995.「日本における『個性』と教育・素描―その登場から現代に至る」森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤　学編『教育学年報 4　個性という幻想』世織書房，53-84.

川崎澄雄　2000.「親からみた子との関係―父親と子どもの関係を中心に―」，神原文子・高田洋子編『教育期の子育てと親子関係』ミネルヴァ書房，74-101.

小山静子　1991.『良妻賢母という規範』勁草書房.

久富善之　1993.『競争の教育―なぜ受験競争はかくも激化するのか』旬報社.

小林正幸　2003.『不登校児の理解と援助―問題解決と予防のコツ』金剛出版.

宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘　1997.『未婚化社会の親子関係―お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣選書.

宮島　喬　1994.『文化的再生産の社会学―ブルデュー理論からの展開』藤原書店.

――― 1995.「文化と実践の社会学へ」，宮島喬編『文化の社会学―実践と再生産のメカニズム』有信堂，3-13.

文部科学省編　2004.『平成 15 年度学校基本調査』.

森田洋司　1991.『「不登校現象」の社会学』学文社.

森田洋司編著　2003.『不登校―その後』教育開発研究所.

長岡利貞 1995.『欠席の研究』ほんの森出版界.
中野 卓・桜井 厚編 1995.『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
中山一樹 1991.「不登校・登校拒否のとらえ方をめぐって―学校不適応対策調査研究協力会議『中間まとめ』を中心として」『教育』41(6), 53-61.
小内 透 1995.『再生産論を読む』東信堂.
落合恵美子 1994.『21 世紀家族へ―家族の戦後体制の見かた・越えかた』有斐閣選書.
桜井 厚 2002.『インタビューの社会学-ライフヒストリーの聞き方』せりか書房.
佐々木 賢 1991.『怠学の研究―新資格社会と若者たち』三一書房.
瀬戸知也 2001.「『不登校』ナラティヴのゆくえ」『教育社会学研究』68, 45-64.
柴野昌山編 1989.『しつけの社会学―社会化と社会統制』世界思想社.
白橋宏一郎 1982.「登校拒否の背景―家庭的・社会的要因」『小児内科』14(5), 21-25.
竹川郁雄 1993.『いじめと不登校の社会学―集団状況と同一化意識』法律文化社.
滝川一廣 1998.「『なぜ？』を考える」, 門眞一郎・高岡 健・滝川一廣著『不登校を解く―三人の精神科医からの提案』ミネルヴァ書房, 1-52.
渡辺亜矢子 1997.「学校ぎらいの背景にあるもの―学校訪問を通して」, 横湯園子編『不登校・登校拒否は怠け？病い？―その「対応」をさぐる』国土社, 159-169.
渡辺秀樹 1999.「変容する社会における家族の課題」, 渡辺秀樹編『シリーズ 子どもと教育の社会学 3 変容する家族と子ども―家族は子どもにとっての資源か』教育出版, 174-191.
Willis, Paul E. 1977. *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Class Working Class Job.* (Westmead, Saxon House or London, Collier Macmillan). 熊沢 誠・山田 潤訳, 1985,『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房.